

来訪者をめぐる説話

——日韓比較の視点から——

川 森 博 司

-
- | | |
|---------------|------------------|
| 1. 韓国の「長者池伝説」 | 4. 来訪者の性格 |
| 2. 「大歳の客」型の昔話 | 5. 来訪者説話の変異とその背景 |
| 3. 登場人物の対立関係 | おわりに |
-

論文要旨

来訪者を歓待したり冷遇したりすることによって、幸運を得たり不幸を招いたりするという形の説話は、世界各地で広く語られているが、本稿はその中で、日本と韓国の事例について比較研究をおこなうことを目的とする。韓国では、やってきた僧を虐待したために長者の家が陥没して池になった、という内容を骨子とする「長者池伝説」が幅広く伝承されており、日本では、「大歳の客」とよばれる類型の昔話が多い。このタイプの説話の基本的な登場人物は、〈来訪者〉、〈来訪者を歓待する者〉、〈来訪者を冷遇する者〉の三者である。まず、来訪者を歓待する者と冷遇する者としてどのような人間関係が設定されているか、を検討すると、韓国の「長者池伝説」では〈舅：嫁〉の対立関係が圧倒的に多く、日本の「大歳の客」型の昔話では〈隣同士〉の対立関係が多い。このことは、それぞれの文化における人間関係への関心のあり方が反映されているものと考えられる。次に、来訪者のバリエーションを見ると、韓国では仏教の僧を中心とするが、それに道士というイメージが重なっていることが多い。日本では旅の宗教者や盲目の宗教者が多く登場している。これは、それぞれの宗教的背景や説話の管理者の違いを反映したものである。第三に、「長者池伝説」で来訪者が冷遇された後の過程の変異型を見ると、来訪者が「風水」の知識にもとづいて長者を減ぼすという形で語られるものが多い。このように来訪者をめぐる説話に風水の思想が結びついた形は日本では見られず、韓国の場合のひとつの大きな特徴と考えられる。説話のように国際的に共通した類型が多い分野では、日本国内の伝承の意味づけをおこなう上でも、国外の類似した伝承と比較して、類似点と差異点を検討することが必要とされるのである。